慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会的成層の研究 : 現代社会と不平等構造
Sub Title	
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1976
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.16 (1976.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000016-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

教育学修士（教育学専攻のもの）

第303号　松丸　修三　ジョン・デューイ教育思想における「経験」の概念 —「経験」概念の性格および「教育的経験」の構造を中心に—

第304号　内藤　俊史　道徳判断における認知的発達

第305号　小野　　裕　家族構成と親子関係

第306号　太田　　勇　「精薄児教育論 —人間存在に対する一つの答え—」

第307号　佐藤　興一　PF-Study の選択肢法化についての一研究

第308号　豊島　義明　幼稚園児における親子関係図式と情緒不安及び態度との関係についての研究

第309号　岸野美由紀　高校生の精神生活についての発達的研究

博　士（甲）

社会学博士

第451号　川　合　隆　男　　昭和50年5月21日

社会的成層の研究—現代社会と不平等構造

〔論文審査担当者〕

主　査　慶応義塾大学 経済学部教授　経済学博士　青　沼　吉　松
社会学研究科委員

副　査　法学部教授　社会学博士　十　時　厳　周
社会学研究科委員

〃　慶応義塾大学名誉教授　米　山　桂　三
法学博士

〔論文審査の要旨〕

第一部　社会的成層の理論的研究

第一章　比較社会学的研究の展開

第二章　社会学と比較社会学的研究

第三章　社会変動について——社会変動としての近代社会の生成と展開

第四章　現代社会と不平等構造

第五章　社会移動の国際比較

第二部　社会的成層の個別的歴史的研究

第六章　近代日本における社会的成層研究の方法と課題

第七章　現代日本の階級構造とホワイト・カラー層——1955年～1970年

第八章　原爆被災の社会的影響と生活構造

第九章　アジア諸国における社会変動と不平等構造

この論文の第一部では，比較社会学的研究の動向に着目しながら理論的研究，歴史的研究および比較研究という三者の相互関連的な展開の必要を説き，社会の成層化と社会移動の問題を扱っている。第二部は社会成層の個別的歴史的研究に当てられている。そこでまず取り上げられているのは近代日本における社会成層研究の方法と課題であり，さらに，現代日本の階級構造の変化に注目しながらホワイト・カラー層の問題が分析されている。これらに続いて出てくるのが，個別的歴史的接近法の立場を重視しながらなされる実証的研究の成果である。原爆被災者の社会変動と不平等構造の問題は，かなり詳細にわたって個別的に記述されている。これに比べると，アジア諸国における同じような問題の論述は結論的次元にとどまっている。筆者が「発展途上国の社会学」として従来から関心を寄せてきたインドネシアなどに関する地域的研究の成果を踏まえて，将来の実証的研究への土台を築こうとする意図が，そこにひめられているのであろう。

第一章では，社会的成層の比較社会学的研究という観点からして，社会学の発展が三つに分類される。第一期の社会学草創期においては，自然科学をモデルとして成立した社会学は，歴史要因を無視したという理由で批判される。第二期の社会学形成期の社会学者のなかでは，E・デールケムとM・ウェーバーの業績が高く評価される。第三期に当たるとされる現代社会学のなかでは，T・パーソンズの機能主義的立場からの比較研究とK・マンハイムの歴史主義的研究が注目される。筆者はこれらを検討したうえで，「歴史的構造主義」の立場を採用する。学説史的な論議を重ねると，際限はないが，研究の視点だけはかなり明白に打ち出されている。歴史的個別性を強調しながらも一般化への志向を失ってはないことが注目される。

理論的研究，歴史的研究および比較研究の三つの相互補完性を究明しようとするのが，第二章の課題である。これにこたえることによって，筆者は産業化と社会的成層の相関関係を把握し，成層構造の比較社会学的研究を目指すという構想を明らかにしている。この構想は本論文の後半においても充分に具体化されているとはいえない。しかし，わが国の社会学界において国際的な比較研

究への関心は強まっているとはいえ，いまだその出発点にあることを考えると，これはやむをえないこととしなくてはなるまい。本論文にみられるような比較研究の再考察は，今日の必要に応ずるものとして高く評価さるべきであろう。

産業社会という近代社会の基本的な特徴に視座を据えて，社会の構造的変化を全体的に把握しようとする試みが，第三章でなされる。近代社会の著しい特質とされる合理化と世俗化にもっとも強く影響したものとして，産業化が重視される。(1)合理性，業績主義，平等の原理，(2)専門的分業，(3)肉体的労働に代わる機械の使用，(4)非生物的機械的エネルギーの活用といった諸特徴からなる産業主義の導入と拡大の過程が，産業化として把握されている。イデオロギーとしての産業主義はさまざまな社会の土着の宗教的倫理やナショナリズムに触媒されつつ多様な産業社会を形成してきたとの指摘は，独創的とはいえないが，適切な指摘である。産業ビュロークラシーなかで，市民的自我は職業的自我のなかに埋没されるという問題を提起しながら，これについての究明はほとんどなされていない。この点を追究すれば，この論文はもっと重厚なものになっただろう。

産業化が人類進歩を自動的にもたらすという近代初期の楽天観は，現代において困難に際会している。ここに近代と現代を区別せしめる新しい歴史的状況が出現しつつあるという認識に立って，第四章「現代社会と不平等構造」が展開される。「現代」という歴史的状況において現在と未来をどのように結びつけていくかという選択的な生き方の決断が迫られているとして，個々の人間の自立化と連帯への社会的条件を科学的に明らかにすることが，ここでの課題にされている。社会的成層についての従来の理論的研究成果たる，マルクス，ウェーバ，ヴェブレン，シュンペーター，ダーレンドルフなどの所説が検討される。その結果，今日の不平等構造は次元的な「貧因」概念によっては把握し切れず，「相対的剥奪感」や「社会的権利」などといった多次元的ものとして理解されなくてはならないとされる。全体的構造的にとらえていくという社会的成層論の立場を明白にしているのは，現代という歴史的状況を踏まえたものとして評価される。本章の関心は拡がり過ぎており，引用があまりに繁雑になっているきらいがある。階級闘争の制度化に関連しながら，「新しい労働者階級」の問題が提起されているが，それは未熟のままに残されている。これらの点については，筆者の今後の研鑽をまつほかはない。

第一部の末尾をなす第五章では，社会移動の国際比較についての諸研究が列挙されている。日本社会学会が国際的協力のもとでなした社会的成層と移動の研究を契機として展開されてきた計量社会学的方法に基づく成果を評価しながらも，筆者は個別的歴史的方法による研究に自らの道を求めている。

第一部では方法論を検討し，第二部でそれを具体化しようとする。第一部の方法論的立場と理論的関心および分析枠に従って，第二部は近代および現代の日本とアジア諸国における社会的成層の研究を個別的歴史的に展開しようとする。

近代日本の社会的成層の研究は，第六章で取り上げられる。この研究は，急激な産業化によってひき起こされた社会問題によって進促されてきた。高田保馬の階級論はわが国での成層理論の先駆であるが，実証的歴史的分析に乏しいという点で批判される。実証的統計的研究が出てくるのは大正期からであるが，本格的な研究は第二次大戦後の国際社会学会の「社会成層と社会移動」についての調査研究による刺激に起因する。しかし，このような研究の多くは実証的国際的ではあるが，歴史的文化的文脈を踏まえた比較研究という点で欠けているところがあるとして，筆者によって批判される。この批判を自らの研究業績によって提示しようとするのが，彼の念願である。これを具体しようとするのが，第七章から第九章までの課題である。

現代日本の階級構造の変化を1955年から70年にかけてのホワイト・カラー層のそれによって示そうとするのが，第七章である。統計資料を駆使しながら分析が行われているが，職業や就業上の地位だけでなく，多元的に社会的成層を究明しようとする試みは成功しているとはいえない。分析が平坦なものに終ってしまっているきらいがある。

第八章は原爆被災者の事例的研究を通じて，特定の社会状況における不平等構造を浮彫りにしようとしたものである。これは筆者が参加した共同研究の成果を利用したものであり，本論文のなかでの唯一の実態調査に基づく事例研究である。かなりの紙面がこの章に当てられているが，大部分は記述であり，一般化への接近にはほど遠いようである。

最後の第九章で，「アジア諸国における社会変動と不平等構造」が総括的に取り扱われているのは，本論文全体の構成からして異質の感が持たれる。民衆の福祉向上のための開発を進めるには，低開発諸国の成層構造に焦点を当てなくてはならないという主張は納得できる。しかし，それに基づく具体的展開が充分になされていない。

「産業化と近代化の間のズレ」を照明するならば，本章はもっと実りのあるものになったはずである。

これまで各章別になしてきたものを総括すると，次のことが指摘される。

本論文の最大の特徴は，社会的成層研究の学説史的検討に重点が置かれていることに求められる。既存理論の広範囲にわたる克明な文献探査に，本論文の学問的価値が見出される。これに基づいて，筆者自身の理論を体系化しようとしている点において，努力のあとが見られる。

第一部の理論的研究に比べると，第二部の個別的歴史研究は見劣りがする。第六章は成層研究を叙述するにとどまっているし，第九章はアジア諸国についての研究の紹介を越えていないきらいがある。第七章のホワイト・カラーの分析は問題点を明確にしていることでは力作である。しかし，原爆被災を対象とした第八章は，本論文の全体的構成ら見て除外するほうが適切ではなかろうかという意見も出てくる。

筆者自身の成層理論を体系化しようとする努力は高く評価されるが，その体系化の主要概念に若干の不明確さが残っている。

比較研究に際して，比較する事象の文脈的把握の重要性を指摘するのは適切である。しかしながら，どのようにして文脈的把握を操作化するかについて明言していないのは惜しまれる。事象とそれが示めす資料がその全体的文脈をどれほど代表しているかを明らかにする具体的手続が明示されていない。第一部の理論的研究が第二部の個別的研究と噛み合っていないということと，これは無関係ではあるまい。

文脈的把握の具体的内容は，①人口構造，②産業構造，③労働市場と労働運動，④教育に分類されている。しかし，これらについての具体的論述はほとんどなされていない。産業化を共通の下敷としているようであるが，「文化差」の分析視角が明確に打ち出されていない。

成層構造分析の主要変数として，①制度的状況，②成層化の基準，③資源配分，④生活構造，⑤階級形成と階級関係という五つの項目が取り上げられている。しかしながら，五項目に限定した理由は積極的には明らかにされていない。さらに，各項目についての説明はあるが，その相互間の関連についてのそれは断片的なものに終っているので，説得力に欠ける。

本論文は筆者の十数年来の学説研究の成果であり，その価値はこの点で認められる。社会的成層の比較研究という複雑な問題に立ち向うに当たっては，現在の研究水準からして，幾つかの不備は許容されなくてはなるまい。社会的成層の学説史的検討というべき優れた内容を持つ本論文を通じて示されている川合隆男君の独創的研究は同君に社会学博士の学位を与えるに足りるものと認める。

博　士（乙）

文学博士

第804号　浅　野　俊　夫　　昭和50年9月23日

ニホンザルの実験的行動分析における基礎的研究

〔論文審査担当者〕

主　査　慶応義塾大学
文学部教授　文学博士　小　川　　隆
大学院社会学研究科委員

副　査　同　同　印　東　太　郎

同　斎　藤　幸一郎

〔論文審査の要旨〕

ニホンザルに関する心理学的視点からの行動研究は従来，数少かったが，京都大学霊長類研究所の開設により，この方面の部門が研究所に置かれ，一層の研究成果が期待されて来た。本論文は研究所の開設当初から研究員として実験施設，資料集録システムの作成に苦心した筆者が心理学における実験的行動分析の適用についての方法論的基礎研究を行ったものである。論文の構成はニホンザルについての実験的行動分析の意義を述べた第一部，理論的展開と　第二部　この見地から行った実験的検証である実験報告とに分れる。

第一部では，1で生物科学における行動研究の現状を論考し，本論文で扱う行動を個体が個体として環境と接触している状態と定義し，種として，神経系として，あるいは遺伝子として接触している状態から区別し，これを研究する上に現象的特質を課題とする場合と発生過程を課題とする場合とがあると指摘する。つづいて2では生得的反射行動，刻印づけ，条件反射，オペラント条件づけがそれぞれにみられる行動の現象的特質は異っているとしても，発生過程として一つの体系の中に位置づけられることを主張し，実験的行動分析による記述の方法論的妥当性を論じている。この記述によって特に行動の形成が個体の環境の働きかけで始まり，強化の随伴性に存し，かつ反応型に任意性があるオペラント条件づけという発生過程が個体の環境適応という点から重視されるとしている。この見地にたって3では従来のサル類の学